

勤労婦人の妊娠期における心理・社会的状況の分析

共同研究者 川井 尚(東京都精神医学総合研究所)

はじめに

仕事をもちながら妊娠、出産、そして育児をしていくことは、多くの心理、社会的なハンディキャップを負うものと考えられ、更に母親は家庭において育児に専念すべきであるとする考え方、子どもへの悪影響が懸念される等、偏見に近いものをも含めて、ネガティブな見方がなお存続しているようである。当然、家庭にいる母親よりも勤労婦人の心身の負担は大きくネガティブに働くことはあろうが、一方、母子双方にポジティブな効果を与えることも十分考えられる。従って、母子保健学的観点から、ポジティブ、ネガティブ両面を明らかにし、それに基づいて、どのような援助をすればよいかの具体的な方策を提出せねばならない。初年度の本報告は、この目的のための基礎資料を集めることであり、今後の研究の手掛かりとしたいと考える。

方法

妊婦の心理・社会的な状況を把握するために、筆者らが作成した臨床心理検査SCT-PKSを、妊娠中の勤労(EMPLOYED MOTHER 以下E)・家庭(NON-EMPLOYED MOTHER 以下N-E)婦人に施行した。なお、SCT-PKSは表1に示す様に領域I妊娠期の母子関係からⅦの母親自身の親子関係に至る七つの領域から構成されている。施行方法は、書きかけの文に続けて、思い浮かんだことを書き文章を完成させるもので、文章完成法といわれる。調査対象は、E162名、N-E430名、計592名である。

整理方法は、得られた反応をグルーピングし、各項目毎に反応カテゴリーを作り集計した。

分析方法は、計38の各項目のカテゴリー毎に両群の差異の検討を χ^2 検定でおこなった。

結果と考察

表2に示す項目に $P < .001$ の有意水準で有意差が認められた。以下、領域毎にその結果と考察を述べる。

妊娠期の母子関係の領域では、項目4、17、30に有意差が認められ、そのカテゴリーの比率から内容を検討したい。項目4「おなかが大きくなっていると、に対して、うれしい、幸せは、E群に、そして母親になる実感はN-E群に、項目17の胎動に対しては、元気、生きている実感、項目30のおなかの中

の赤ちゃんに対して、愛情を感じる、楽しみ、の感情がN-E群に多く示されている。この結果をみると、N-E群の方がより、母親としての実感や胎児に向かう情緒的な態度が示されている。これは、云うまでもなく量的な差異であるが、この理由を以下考えてみたい。考察に用いる資料は、PKSの妊娠過程による反応の変化^(*)、及び、表3に示した勤労婦人のレポートである。まず、妊娠の初・中・後期とすすむにつれて、母親と胎児の関係が、どのような変化を示すかであるが、妊娠に気づいたとき、嫌だ、後悔した、不安、心配などの反応が、中・後期よりも前期に多く、おどろき、やっぱり、とうとうなどの反応が前期に少ない。妊娠へのネガティブな反応も妊娠過程がすすむにつれて減少していくことが予測される。

おなかが大きくなってくると、恥かしいが前期により多く、これは想像上のものであろう。うれしいが恥かしい、赤ちゃんの存在感が中・後期でより多くなるのは心理的な交流の結果であろうと思われる。出産については、不安、心配、怖い、五体満足に生まれてほしいは中・後期に多く、不安だががんばる、女性としての喜びは前期に高い。中・後期は出産への現実不安が強くなると考えられる。胎動では、回答失敗・拒否、まだわからないが前期に多く、中・後期は生きている実感、安心、話かけるなどの反応が高率で、現実感を伴った交流が生じてくることが理解される。おなかの赤ちゃんにたいしては、回答拒否、実感がない、いい子に育つように、責任・義務があるなどの観念的な反応が前期に多い。一方、中・後期では、愛情を感じる、いとoshii、よく話しかけるが高率を示している。

全体的にみて、前期と中・後期とはその反応が異なり、その差異の要因は実感の有無とってよい。中・後期へとすすむにつれて、前期の妊娠への情緒的不安が、身体の変化や胎動等をとおしての胎児との心理的交流の中で減少し、次いで愛情が生まれ、赤ちゃんの存在を実感し、よく話しかけるといった行動を生じさせていくように考えられる。

E群に、母親としての実感や、おなかの赤ちゃんへの情緒的態度を示すことが少ないとすれば、仕事をめぐる現実的で、処理の難しい問題があつて、これらの過程が妨げられている人たちがいることを予想させる。表3は、勤労婦人のレポートをまとめたものであるが、第一にあげられるものは、職場の受け入れ、理解のあり方である。記載したように職場での対人関係や受け入れが悪ければ、妊婦への心身の負担は重く、加えて諸制度の問題がある等であれば、仕事と妊娠との折り合いがつきにくく、おなかの赤ちゃんに心を寄せたり、妊娠事態に関心をもつゆとりが、妊娠中期以降になっても生じにくい人があるものとする。勤労婦人の妊娠・育児をめぐる社会的状況の実態調査を行い、それに基づく改善や援助の方策をみつけることは、なお、必要な現況にあると思われる。

さて、おなかが大きくなって、身体がおっくう、不活発といった人はN-E群に多く、領域Ⅳの自分の身体が健康であるとするのはE群の方に多い。このことは、勤労婦人の方が仕事をもちながら生み育てようとする、より積極的な態度の反映とも考えられる。

次に、領域Ⅲの「夫婦関係」では、仲がよい、幸せ、が、E群に多く、また項目24の「困りはてたと

き私は」に対して、相談相手に夫がより選ばれているのはE群である。従って、E群ではより夫婦して協調協力していこうとする姿勢があると考えられる。領域IVの女性性の領域で、「私は女として」に、E群では、幸せ、満足が多く、一方、未熟で、不十分で、半人前だ、とする反応は、N-E群に多くみられ、ここでは仕事をもつ人の自己充実感や自己信頼がみられている。

領域V、VIについて、「困りはてたとき」の相談相手が夫と母で、両者が逆になっていること、「母親の母子関係」で、母によく甘えた、がN-E群に、甘えたことがない、という反応がE群に多くみられている。家庭にいる人のほうが自分の母親に対して依存的であるあるいはより活用しているのか、それとも、勤労婦人は、より母子関係から独立しているのか、項目32の「母は」という項目に対して回答拒否も多いことも併せて、子どもを生み育てながら仕事を続けていこうとする心理的な動機に、その人の母子関係も関連を有していることが考えられる。この点に関して今後、検討すべき課題として残される。項目31の「仕事」について、仕事を続ける意欲、は当然E群に多い。しかし、将来仕事をもちたい、とする人が、家庭婦人のなかにも31%あることは注目される。

以上の結果をみると、勤労婦人にとっての妊娠期の課題は諸制度の整備を含めて、仕事と妊娠との折り合いを早期につけられるよう援助することがあげられよう。このことがうまくいけば、妊娠の中・後期にかけて、母親としての実感に代表される妊娠期の母子関係の発達が期待できよう。一方、勤労婦人は、心身ともに積極的な態度をもっており、夫婦の協力関係 そして、自己充実感、自己信頼を有する等、ポジティブな面を充分有していることを指摘した。

おわりに

SCT-PKSによって、妊娠期における勤労婦人の心理・社会的状況の基礎的な分析を行った。来年度は、妊娠期に引き続き出産直後（新生児期）、乳児期、幼児期の状況を調べ、最終年度には、これらの知見をふまえて母子保健の観点から、具体的な保健指導や援助の方策を提起したいと考える。

火
川井 尚ほか：妊婦と胎児の結びつき—SCT-PKSによる妊娠期の母子関係研究—

周産期医学 13(12) 2141-2146, 1983

表1 SOT-PKS (妊婦用) 項目

領域I	妊娠期の母子関係
2	はじめて妊娠に気づいたとき、私は
4	おなかが大きくなってくると
6	出産
12	妊娠して、私のかわったことは
17	おなかの赤ちゃんが動くとき
30	私はおなかの赤ちゃんに対して
領域II	想像上の母子関係
11	私は子どもと
13	子どもを育てることは
25	私の子どもはきつと
34	子どもが泣きやまないとき
領域III	妊娠期の父子関係
10	赤ちゃんが生まれるときいて、夫は
23	夫はおなかの赤ちゃんに対して
36	夫と子どもは
領域IV	夫婦関係
5	夫と私は
18	夫に対して私は
27	私が妊娠して、夫のかわったことは
領域V	女性性
8	もし私が男だったら
19	私は女として
22	乳房
28	私のからだは
33	性
35	私は母親として
領域VI	母自身のこと
1	私は、子どものころ
14	私が泣きたくなるのは
16	心配なことは
21	私は将来
24	困りはてたとき、私は
31	仕事
37	親友は
領域VII	母親自身の親子関係
3	私と母と
7	母に甘えたこと
9	私のきょうだい
15	父は
20	父と母は
26	私は父と
29	父に甘えたこと
32	母は
38	夫の親と私は

表2 SOT-PKS カテゴリ合計 (X²検定)

	E	N-E
I 妊娠期の母子関係 (X ² 検定)		
項目4 おなかが大きくなってくると うれしい、幸せ	19.1	11.2
母親になる実感	14.8	18.4
身体がおっくう、不活発	28.4	34.2
項目17 おなかの赤ちゃんが動くとき 元気、生きている実感	30.2	37.0
項目30 私のおなかの赤ちゃんに対して 愛情を感じる、楽しみ	7.4	13.3
II 想像上の母子関係		
項目25 私の子どもはきつと 元気、明るい、やさしい、 すなお、丈夫	30.0	42.0
III 夫婦関係		
項目5 夫と私は 仲がよい、幸せ	50.0	45.3
IV 女性性		
項目8 もし私が男だったら 社会の中でやっていけそう にない	1.9	7.9
項目9 私は女として 幸せ、満足	34.6	27.9
未熟、不十分、半人前	5.6	10.5
項目28 私のからだは 健康、丈夫、元気	33.3	24.4
項目33 性 恥ずかしい、むずかしい	24.1	17.9
V 母親自身のこと		
項目24 困りはてたとき私は 夫に相談	44.0	40.0
母に相談	6.2	12.8
項目31 仕事 仕事を続ける意欲	35.0	4.8
仕事をもちたい	8.7	31.6
育児、家事が仕事	3.8	13.6
一般論	3.8	10.2
VI 母親の親子関係		
項目7 母に甘えたこと よく甘えた	54.9	59.8
甘えたことはない	30.2	26.0
項目32 母は 回答拒否	10.3	4.7

E = : Employed

N-E = : Non-Employed

表3 職場の受け入れ、理解—対人関係—

調査対象	一般職	8名
	学生	1名
	専門職	22名
	保母	9名、弁護士 1名
	医師	2名、音楽家 1名
	教員	1名、心理職 7名

職場の受け入れ、理解がなければ諸制度もうまく利用できない

仕事のやりくりしか考えない職場、上司、同僚
仕事に役立たない、無責任、能力がないとする評価
甘えている、仕事をしない等の陰口

身体への変化を話の種にする

受け入れが悪いため、妊娠告知ができず、心身の負担に
職場に迷惑をかけるという心の負担

仕事の調整がつくまでの心労—妊娠をよろこべない
職場の管理、労働の強化—葛藤、不安、心身の負担—

生まれることをよろこび祝福してくれる職場

普段の人間関係がよいこと

諸制度

つわり休暇制

通勤時間の繰り下げ制

フレキシブルタイムの導入

検診、母親学級の特別休暇制

夫の産休制—前後4週間

父親学級の設定

産休とその期間延長（育児休、時間休の検討）

保育園の内定制の確立（福祉事務所の対応）

保育適応月齢と産休機関との関連

労働基準法65条、軽作業への配置転換

育児期間中のパートタイムorジョブシェアリング

補助要員制

夫婦関係

妊娠をよろこび一緒に育てていこうとする気持ち

家事、育児への協力と精神的な支え

産前、産後、そばにいること

第2子以降の協力、思いやりの減退

その他の人間関係

姑の理解のなさ

上の子を十分にみてあげられない

上の子の病気への対応

妊娠をよろこび、協力、支援してくれる

近隣に友人をもち、よい人間関係をつくっておくこと

—社会的孤立を防ぐ—

子どもをみてくれる人を見つけておくこと

胎児への心配—流産、障害児への心配—

仕事の質、量のきつき

赤ちゃんを優先にできないことへの申しわけなき

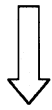
勤労婦人の妊娠、出産に異常が多いとの情報

仕事の量、質の変化

今まで通りにやれない

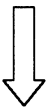
意欲はおちないが、制限はある

仕事の質、量とも迷惑をかけまいと気負うことの弊害



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

仕事をもちながら妊娠, 出産, そして育児をしていくことは, 多くの心理, 社会的なハンディキャップを負うものと考えられ, 更に母親は家庭にいて育児に専念すべきであるとする考え方, 子どもへの悪影響が懸念される等, 偏見に近いものをも含めて, ネガティブな見方がなお存続しているようである. 当然, 家庭にいる母親よりも勤労婦人の心身の負担は大きくネガティブに働くことはあろうが, 一方, 母子双方にポジティブな効果を与えることも十分考えられる. 従って, 母子保健学的観点から, ポジティブ, ネガティブ両面を明らかにし, それに基づいて, どのような援助をすればよいかの具体的な方策を提出せねばならない. 初年度の本報告は, この目的のための基礎資料を集めることであり, 今後の研究の手掛かりとしたいと考える.